第２章　第３次計画期間中の成果と課題

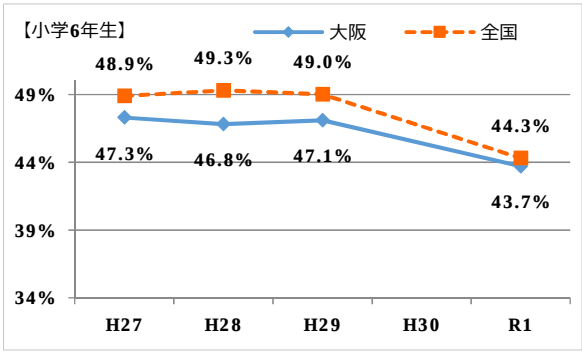
１　子どもの読書活動の現状について

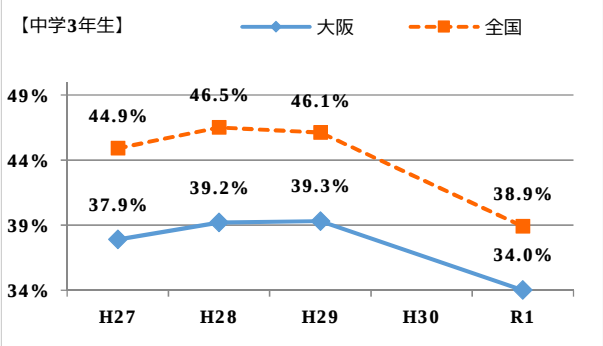
１．「全国学力・学習状況調査」（文部科学省）※令和２年度の調査は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、未実施。

①読書が好きな子どもの割合

「読書が好き」な子どもは、中学生になると割合が低くなることが課題です。

また、府の「読書が好き」な子どもの割合は、全国平均より低く、中学生は小学生に比べて大きな差があります。

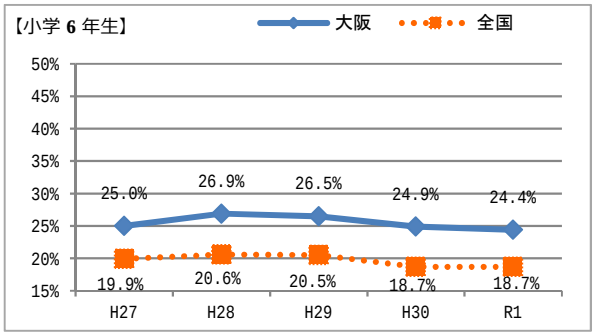


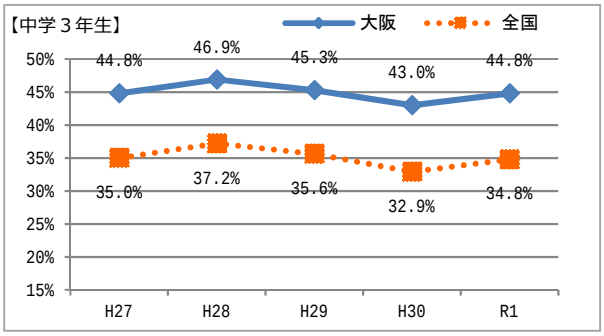


（※）平成 30 年度質問項目なし

②普段、全く読書をしない子どもの割合

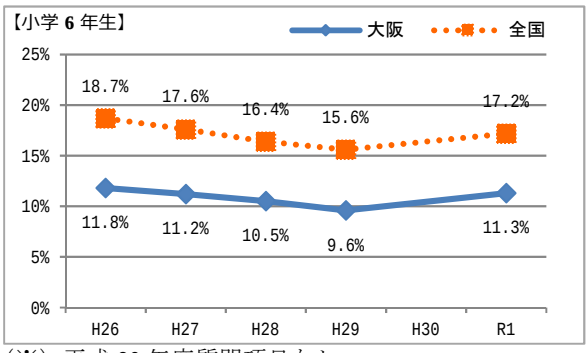
学校の授業時間以外の普段の日（月～金曜日）に読書を全くしない小学生は 20％以上、中学生は 40％以上おり、府の割合は、全国平均よりも高くなっています。

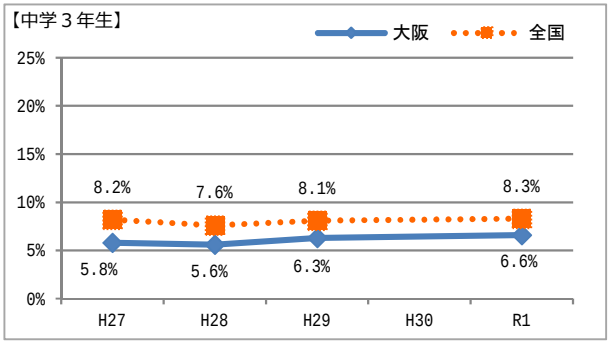




③週１回以上、学校や地域の図書館へ行く子どもの割合

学校や地域の図書館へ週に１回以上行く小学生は、10％程度、中学生は５％程度となっています。また、府の割合は、全国平均よりも低くなっています。





（※）平成 30 年度質問項目なし

２．令和元年度大阪府子ども読書活動調査

第４次計画の策定にあたり、府内の子ども・保護者の読書活動に関する意識や習慣、学校・教育保育施設及び社会教育施設における子どもの読書活動推進の取組み状況等を把握・分析を行うことを目的とし、令和元年 12 月から令和２年２月に「令和元年度大阪府子ども読書活動調査」（大阪府教育庁）（以下「令和元年度読書調査」という。）を実施しました。（第４章 参考資料「１．令和元年度大阪府子ども読書活動調査」参照）

①読書をする子どもの読書時間帯（学校で授業のある日）

小学生、中学生では、「登校して授業が始まるまでの時間」の割合が高くなっています。これは、一斉読書の取組みの影響があるものと考えられます。

また、帰宅してから寝るまでの時間に読書をする子どもの割合も高くなっています。

その他の時間帯では、本を読んでいる子どもの割合は低くなっています。

	朝、登校するまでの時間	登校して授業が始まるまでの時間	休み時間	昼休み時間	放課後、下校するまでの時間	帰宅してから寝るまでの時間	平日は読書をしない	無回答
小５	9.7%	49.3%	31.1%	13.3%	9.3%	52.4%	12.2%	1.3%
中２	5.9%	63.8%	19.4%	12.7%	4.4%	37.7%	8.7%	1.3%
高２	11.5%	28.5%	14.7%	5.5%	8.8%	50.4%	15.5%	1.4%

②読書をする理由

「本の内容を楽しむことができる」がどの年齢でも最も割合が高くなっています。「気分転換になる」もどの年齢でも共通して高くなっています。「知らなかったことを知ることができる」の割合も高いですが、年齢が高くなるにつれて割合が減少しています。

	気分転換になる	感動を得ることができる	本の内容を楽しむことができる	いろいろな人の考え方に触れることができる	空想したり、夢を描いたりすることができる	趣味を深めることができる	文章を読む力がつく	他の人と話す話題が増える
小５	52.8%	21.6%	69.3%	20.3%	40.8%	29.1%	43.7%	36.4%
中２	46.7%	31.6%	68.6%	21.7%	33.3%	29.6%	35.4%	19.6%
高２	49.9%	33.0%	69.1%	26.7%	29.9%	28.3%	28.3%	15.3%

	言葉の表現力をつけることができる	物事を深く考えられるようになる	勉強の役に立つ	知らなかったことを知ることができる	わからない	その他	無回答
小５	28.0%	22.6%	37.1%	62.1%	5.2%	11.6%	1.1%
中２	25.3%	18.4%	20.8%	44.2%	6.7%	6.5%	0.9%
高２	22.9%	18.2%	13.9%	36.0%	4.6%	3.8%	0.6%

③読書をしない理由

年齢が上がるにつれ「読書をする時間がない」と回答する子どもの割合が高くなっています。また、「読みたいと思う本がない」「本を読むのがめんどう」と回答する子どもの割合はどの年齢も高くなっています。

	読書をする時間がない	読みたいと思う本がない	どの本を読んで良いかわからない	読書をする必要性を感じない	本を勧める人が周りにいない	本の値段が高い	地域の図書館が近くにない	本屋が近くにない
小５	33.2%	53.3%	13.0%	21.2%	8.7%	9.8%	4.3%	7.1%
中２	37.3%	49.4%	11.2%	22.1%	7.9%	15.2%	3.7%	9.3%
高２	48.1%	39.1%	10.7%	12.3%	5.6%	9.2%	2.7%	3.3%

	家に読みたい本がない	学校図書館（室）が開いていない	文字を読むのが苦手	本を読むのがめんどう	友だちや家族が本を読んでいない	わからない	その他	無回答
小５	32.6%	0.5%	28.8%	44.6%	11.4%	8.2%	9.8%	10.3%
中２	24.9%	0.9%	16.1%	42.4%	6.8%	9.3%	6.1%	9.1%
高２	15.7%	0.1%	16.6%	35.8%	5.8%	7.3%	4.0%	6.5%

④読書をする時間がない理由（調査対象：③で「読書をする時間がない」と回答した児童・生徒）

「塾や勉強」を理由と回答する子どもの割合が高く、中高生になると「部活動」や「アルバイト」で読書をする時間がない子どもの割合が高くなっています。

また、「テレビ」や「インターネット・SNS、ゲーム、遊び」で読書をする時間がないと回答した子どもの割合も高くなっています。

	塾や勉強	部活動	学校での放課後活動	習い事やボランティア活動	家事・手伝いや家の用事など	アルバイト	テレビ
小５	44.3%	—	3.3%	39.3%	18.0%	—	44.3%
中２	56.9%	75.0%	9.4%	26.3%	18.8%	—	33.8%
高２	40.3%	50.4%	2.5%	8.1%	14.1%	30.3%	27.5%

	インターネット・メール・SNS・電話	友だちとの遊びや付き合い	ゲーム	漫画・雑誌	その他	無回答
小５	29.5%	39.3%	59.0%	44.3%	11.5%	1.6%
中２	62.5%	45.6%	45.6%	30.0%	6.3%	1.3%
高２	51.4%	38.0%	27.7%	20.9%	5.5%	1.5%

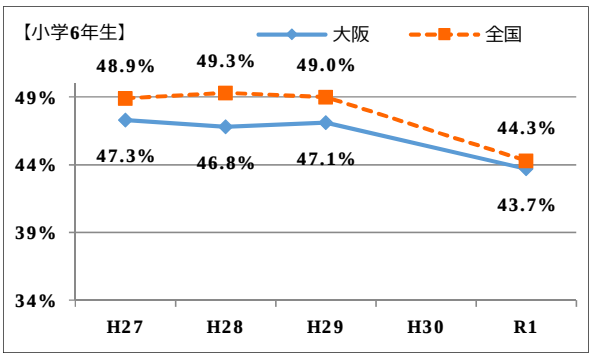
2　第３次計画における成果と課題

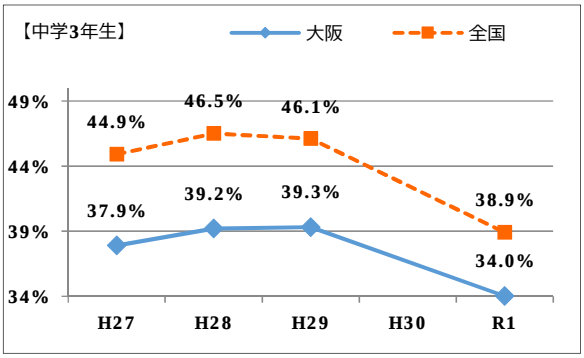
１．第３次計画で設定した指標の達成状況

成果指標：「読書が好き」な子どもの割合が全国平均以上となる。

令和元年度「全国学力・学習状況調査」（文部科学省）結果における府の「読書が好き」な児童・生徒の割合は、小学６年生：43.7%（全国 44.3%）、中学３年生：34.0%（全国 38.9%）となっており、全国平均には達していません。

【「読書が好き」な児童・生徒の割合】





２．第３次計画における成果と課題

（１）取組み

第３次計画期間中では、子どもが本と親しむようになるためには、まずは、本の楽しさや魅力と出合うことが大切であり、本との良い出会いを繰り返すことによって読書習慣を育み、さらには自分の課題に応じて必要な情報を読み取り活用する力を身につけていくことが望まれるという考え方、以下の４つの項目に沿って取組みを実施してきました。

「子どもが本と出合うために（きっかけづくり）」
「子供が本と親しむために（本を読むことの習慣化）」
「子どもが目的に応じて読む力をつけ、本から学ぶために（読む力、考える力の育成）」
「子どもの読書環境づくりを支える人と体制をつくるために（前記３項目の取組みのベース）」

なお、取組みを進めるにあたっては、次の３つの視点を重視して取組んでまいりました。

・家庭、学校、地域、街なかで、乳幼児や児童への読み聞かせの機会の拡大
・読書離れが進む中高生が、読みたいと思う魅力的な本と出合う機会の拡大
・公立図書館司書、司書教諭及び学校司書を含めた教職員、子どもに関係する施設職員、保護者、読書活動ボランティア等の子どもの読書活動に関わる人材の確保及びスキル向上並びに支援人材同士で、相談・協力・連携できるネットワークづくり

（２）成果

取組みの成果としまして、図書館でのおはなし会や、第３次計画期間中に新たに取組みを行った商業施設等でのえほんのひろば、作家が学校園に訪問するオーサービジット事業等により、「家庭、学校、地域、街なかで、乳幼児や児童への読み聞かせの機会の拡大」をすることができました。

また、平成 27 年度から開催している大阪府ビブリオバトル中高生大会や府立中央図書館におけるＹＡコーナー及びＹＡ向けホームページの充実、平成 30 年度から始めた府の公式 Twitter による中高生向けの本紹介等により「読書離れが進む中高生が、読みたいと思う魅力的な本と出合う機会の拡大」を図りました。

その他、毎年度、学校図書館関係者や公立図書館司書、読書ボランティア、その他子ども読書に関わる支援者に対して研修や講座等を実施することにより「子どもの読書活動に関わる人材の確保及びスキル向上並びに支援人材同士で、相談・協力・連携できるネットワークづくり」を進めてきました。

それらの取組みを行うことにより、「読書が好き」な子どもの割合は全国平均と府平均の差を縮めることができました。

（３）課題

一方で、「読書が好き」な子どもの割合は、計画期間の５年間で減少傾向にあり、また、「全国平均以上」を達成することができませんでした。

「令和元年度読書調査」での「読書をしない理由」において「読書をする時間がない」「読みたいと思う本がない」「本を読むのがめんどう」という特に割合の高かった回答から、子どもの読書活動を取り巻く社会情勢の変化や国の計画策定における有識者意見等を踏まえ、分析することとしました。

	読書をする時間がない	読みたいと思う本がない	どの本を読んで良いかわからない	読書をする必要性を感じない	本を勧める人が周りにいない	本の値段が高い	地域の図書館が近くにない	本屋が近くにない
小５	33.2%	53.3%	13.0%	21.2%	8.7%	9.8%	4.3%	7.1%
中２	37.3%	49.4%	11.2%	22.1%	7.9%	15.2%	3.7%	9.3%
高２	48.1%	39.1%	10.7%	12.3%	5.6%	9.2%	2.7%	3.3%
	家に読みたい本がない	学校図書館（室）が開いていない	文字を読むのが苦手	本を読むのがめんどう	友だちや家族が本を読んでいない	わからない	その他	無回答
小５	32.6%	0.5%	28.8%	44.6%	11.4%	8.2%	9.8%	10.3%
中２	24.9%	0.9%	16.1%	42.4%	6.8%	9.3%	6.1%	9.1%
高２	15.7%	0.1%	16.6%	35.8%	5.8%	7.3%	4.0%	6.5%

《分析結果》

①「時間がない」➡ 読書時間を確保できない、読書のために時間を割かない

「令和元年度読書調査」の結果にあったように、「読書をする時間がない」理由は、「部活動」「塾や勉強」「インターネット等」と回答する割合が高くなっています。

上記の理由のうち、「勉強」や「部活動」等、子どもが自由に時間の使い方を決めることができない活動がある一方で、計画期間中に大きく変化したこととして、第１章「５．子どもの読書活動を取り巻く社会情勢の変化」「（１）グローバル化と情報通信手段の普及・多様化」で記載したとおり、５年前と比較して、子どものインターネットの利用時間が増加しており、その利用内容は動画視聴、ゲーム、コミュニケーション（SNS）、音楽視聴等の割合は高く、電子書籍の割合は低くなっています。

このことから、「読書が好き」な子どもの割合が減少傾向にある要因の１つとして、読書以外（インターネットを利用した動画視聴、ゲーム、SNS 等）のことに時間を費やすことが増え、読書に時間を割かない子どもが増加している傾向があると思われます。

②「読みたい本がない」➡ 興味を持てるような本がない

「読みたいと思う本がない」と回答した要因については、主に以下の３つが想定されます。

・本自体に興味・関心が向けられていない
・身近な場所にある本が、読みたいと思う本ではない
・身近な場所に本がない

「本自体に興味・関心が向けられていない」については、もともと読書への興味・関心がない子どもや必要性を感じていない子ども、上記①で示したとおり、読書以外のことに興味・関心が向けられて、読書への興味・関心が薄れている子どもがいることが考えられます。

「身近な場所にある本が、読みたいと思う本ではない」「身近な場所に本がない」については、学校図書館の開館割合が増加していることや、学校や教育保育施設と公立図書館の連携割合が増加していることなどから、５年前と比較すると読書環境の整備は進んでいると考えられますが、それらの環境で子どもが興味を持てるような本がないということが考えられます。
（第４章 参考資料「１．令和元年度大阪府子ども読書活動調査」参照）

また、平成 28 年度「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」（文部科学省）によると、「読書を行っていない高校生は、中学生までに読書習慣が形成されていない者と、高校生になって読書の関心度合いが低くなり本から遠ざかっている者に大別されると考えられる。」と言及されています。

③「読むのがめんどう」➡ 本を読むことが面倒、文字を読むことが苦手

「本を読むのがめんどう」と回答した子どもは、「本を読まない理由」を複数選択している割合が高く、特に「読みたいと思う本がない」「読書をする時間がない」「家に読みたい本がない」「読書をする必要性を感じない」「文字を読むのが苦手」を選択している割合が高いという結果となりました。

このうち、「文字を読むのが苦手」は、読む力が身に付いていない子どもがいる可能性があり、国の有識者会議では「小学校中学年になると、最後まで本を読み通すことができる子どもとそうでない子どもの違いが現れ始める。」という指摘がされています。（「子どもの読書活動の推進

に関する有識者会議 論点まとめ」（文部科学省））

３．第４次計画の方向性

令和元年度調査結果、子どもの読書活動を取り巻く社会情勢の変化及び第３次計画における成果と課題を踏まえ、第４次計画においては、「読書のために時間を割かない」「興味を持てるような本がない」「本を読むことが苦手」など、発達段階によって異なる理由で読書活動ができていない子どもがいることを踏まえた方策を講じることとします。

また、第３次計画で行った発達段階や生活の場に応じた環境整備を基礎としつつ、第４次計画では、発達段階ごとの特徴を更に考慮しつつ、子ども一人一人に合った読書活動を進めるための取組みを一層拡大します。